

公共政策大学院生に薦める三冊の本

京都大学公共政策大学院教授

小野 紀明

私の専門は西洋政治思想史です。ご存じのように、公共政策大学院では基礎科目「現代規範理論」と展開科目「政治哲学古典講読」を担当しています。いつも言うように、実務家を育成する専門職大学院である公共政策大学院にあって、政治思想史の専門家が専任教員として所属することが風変わりですし、これらの科目が配置されていることもかなり異色です。今日の公的領域が直面している現実的な問題を解決することを任務とする実務家にとって、過去の抽象的な議論を考察する政治思想史は、一見したところ無縁であるように思われるからです。ですから、私は学部学生を対象とする政治思想史の講義と公共政策大学院の「現代規範理論」では、授業のスタンスを意識的に変えています。歴史性をまったく無視することは不可能であるとしても、できるだけ過去の文脈から切り離して、現代のアクチュアルな問題とリンクさせて思想

を論じること
を、「現代規範
理論」では心
懸けているの
です。また「政
治哲学古典講
読」では、で
きるだけ政治

を個人の实存の問題とは関わりのない即物的な対象として論じたテキストを選び、客観的に考察するように努力しています。学部時代にこうした問題に自分なりの解答を得たはずの修士課程の学生を相手にして、人間如何に生きるべきかといった青臭い議論は無縁であるし、失礼でもあるからです。社会や国家について自分の問題とは切り離して論じる、いわば大人の姿勢は、もともとアメリカで盛んであったものですが、今日では日本を含めて世界的に大流行の規範理論あるいは政治哲学の立場でもあるのです。皆さんは、テレビで有名になったマイケル・サンデル先生の現代正義論の講義をご存じでしょう。公共政策大学院に思想に関する授業が置かれるとすれば、まさに規範理論あるいは政治哲学のようなものが相応しいのです。
以下に紹介する三冊は、公共的な仕事に従事する者にとって必読であると私が考えるものです。

私が選んだ本ですから、いささか現実とは縁遠いという印象を与えるかもしれません。しかし、間違いない現代と切り結んでいます。政治思想史の議論は一見したところ現実とは無縁に見える、と私は言いました。しかし、公共政策大学院は、目の前のトラブルをとりあえず小器用に処理する単なる能吏を生産する場ではありません。それは、実務家として最低限必要な能力ではありませんが、それに加えて本大学院の学生諸君には、現代の公的領域を一步退いて相対化し、その歴史的位を測定して、今後に蒙るであろうさらなる変容を予測する能力を身に付けて欲しいのです。こうした観点から、思想史に関連する科目が公共政策大学院に置かれていることには重要な意味があるのです。

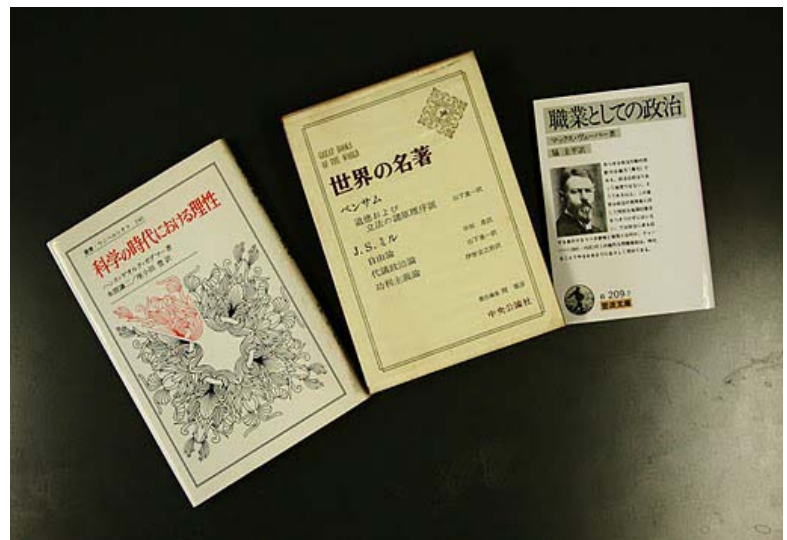
1. マックス・ウェーバー『職業としての政治』

(脇圭平訳、岩波文庫)

公共的な職務に従事する者は、今日の公的領域の独自性を知っておかなくてはなりません。一九一九年一月に行われたこの講演は、生涯、学者として、そして実践的政治家として政治の場で格闘し続けたウェーバーの遺言ともいえるべき発言であり、実務家も含めて国家や政治を考える者にとって必読の文献です。マキャベリ以降、公私二分法、つまり公的領域と私的領域の

分離が常態となった近代にあつて、最終的には物理的暴力である政治権力によって担保された国家という公的領域から、万人を納得させる価値が消滅していきます。こうしてニヒリズムの巷と化した政治は、それぞれが掲げる価値に基づいて権力を奪い合う「神々の闘争」の場となり、そうした状況下で現実・に責任をもつ真の政治家は、自らが信じる価値のために雄々しく闘うと同時に、現実政治において失敗を犯したときには潔く責任をとるべきです。以上の議論の過程で、名高い心情倫理と責任倫理の概念や政治家と官僚の役割分担に関するウェーバーの主張が繰り広げられるのです。

公的領域から価値が消滅し、政治は功利的な打算によって動かされているという現状認識、にもかかわらず政治は価値をめぐる闘争であるべきであり、その価値は、結局、理性的な議論を越えた信仰に求めるしかないというウェーバーのペシミズムについては、様々な評価ができるでしょう。彼はファシズムを予言したのか、あるいはもっと積極的にそれを待望したのか、ウェーバー解釈をめぐる論争の主題です。また、万人が受け入れる価値を、功利主義に犯されたかに見える社会の深部に求めようとする、あるいはもう一度、真の全体の利益を目指す理性的な議論で発見しようとする試みが、今日の規範



理論の隆盛を招いていることは、「現代規範理論」の授業でお話しした通りです。しかし、今日でも依然として考察の出発点にウェーバーの『職業としての政治』が位置していることは、まぎれもない事実なのです。

2. ジェレミー・ベンサム『道德および立法の諸原理序説』(山下重一訳、中公世界の名著三八)

私は授業で数多くの思想家を扱いますが、自分自身の好き嫌いは抑えて中立的に論じるのを

旨としてきました。けれども、昔から例外が一人だけいました。イギリス功利主義の創始者ベンサムです。講義でベンサムをとりあげるときは、嫌悪感剥き出しに罵倒するのが常なのです。正邪善悪の道德的判断を自分にとって得か損かという功利的判断に還元する快樂主義的道德、精神的快苦を物質的快苦そして最終的には金銭に置き換えていく発想など、ベンサムの思想には吐き気を催させるものがあります。でも、きれいごとを言うのはやめましょう。冷静に自身をふりかえってみると、なるほど、大半は功利主義的に計算して考え、行動しているのです。そして、なによりもリベリズムに基づく政策は、功利主義を基本にしているのです。授業でも強調するように、今日の規範理論は一樣に功利主義を批判します。しかし、国民全体を対象として政策を立案・実行・評価する実務家は、まず功利主義の立場に身をおくべきです。そうせざるをえないのです。正義について、あるいは真の全体の利益について、じっくりと原理的に考えている暇はなく、可及的速やかに判断し実行することが求められている実務家に、現在のところ功利主義に代わる政策根拠がありうるでしょうか。全面的に賛成するどうかはさておき、公共政策大学院の学生諸君はまずは功利主義の古典、ベンサムの『道德および立法の

諸原理序説』(二七八九年)を読むべきです。読んで、その乾いた、割り切った精神を体得すべきです。この訳本は部分訳ですが、ベンサム精神はわかるはずですが、二〇世紀になつてからシジウィックやヘアの修正を経た現在の功利主義は、公私二分法を前提にして「公共哲学」として公的領域における基本をなしているのです。

それにしても、ベンサムの功利主義が多大の問題をはらんでいることは否定できません。それは、快苦に質的差異を認めてはいない点にあります。要するに、卑しい物質的快苦と高尚な精神的快苦の区別を認めてはいないことにあります。ベンサム以降の最大の功利主義者ジョン・ステュアート・ミルは、この点でベンサムを修正しようとした『功利主義』一八六一年)。このことによつてミルは、人間の高貴さ、尊厳を救い出したのです。でも、この修正も実務家には無縁のものかもしれません。あらゆる価値を、一滴の後悔の涙ではなく金銭に置き換えていくのが、現代的な政治だからです。実務家は、この即物的な姿勢を甘受せざるをえないのです。

3. ハンス・ゲオルク・ガダマー『科学の時代における理性』(本間謙二・座小田豊訳、法政大学

出版局、一九八八年、叢書・ウニベルシタス二四六)

三冊目には、『公共空間』二〇一〇年秋号の特集テーマにちなんで、科学技術をテーマにした本をあげておきましょう。今日の規範理論にとつても、幾つかの理由から科学技術は最も重要なテーマですが、とりわけアリストテレスの観想(テオリア)と実践(プラクシス)の区別と科学技術の関連は、授業で何度も強調したように現代規範理論に共通のテーマになっています。

功利主義も含めて現代の社会科学の主流は、唯一普遍の理論に基づく理想的なユートピアを、科学技術を駆使して創造しようとする社会工学的発想を特徴としています。こうした観想優位の立場に対して、規範理論は社会科学における普遍的な知を否定して、複数の解決策の中からその都度の望ましい選択を求める実践知の立場をとります。また、実践知の重視は、リベラリズムの人間観、すなわち、世界から屹立して、世界を合理的に設計しようとする超越的自我の観念にも懐疑の眼差しを向けます。近代の主流を作ってきた観想知を批判して、社会科学における実践知を強調した立場が、ガダマーを代表とする解釈学です。ガダマーの主著は解釈学の古典『真理と方法』ですが、一九七六年に公開されたこの『科学の時代における理性』にも、

共通に実践知の重要性を説いた論文が集められています。ガダマーはあくまでも哲学の立場を堅持したのであり、社会改革を伴う規範理論に圧倒的な影響を与えつつある哲学者です。政治思想史を研究する私としては、公共政策大学院の学生諸君にはぜひ頑張つてこの現代哲学の最高峰とも言える著作に親しんで欲しいと考えています。

小野 紀明

おの のりあき



1949年生まれ。京都大学大学院法学研究科修士課程修了。1987年京都大学法学博士。神戸大学法学部教授などを経て、1995年京都大学大学院法学研究科教授。2006年京都大学公共政策大学院長(2007年まで)。現在、京都大学公共政策大学院教授。専門は西洋政治思想史。主著『政治理論の現在—思想史と理論のあいだ』(世界思想社、2005年)、『ハイデガーの政治哲学』(岩波書店、2010年)。